

## 第24回くまもと自然保護講演会記録

- 1 日時 2019年1月14日(成人の日) 14:00~16:00
- 2 場所 熊本県民交流館パレア 9階 会議室1
- 3 参加者 84名(熊本県自然環境研究連合会、水俣芦北自然観察会、熊本野生生物研究会、熊本記念植物採集会、八代植物友の会、日本野鳥の会熊本県支部、阿蘇地区パークボランティアの会、自然観察指導員熊本県連絡会、矢部郷自然観察会、熊本県自然保護課、一本の木財団、一般参加者)

### 講演『有明海の食物連鎖』 熊本大学名誉教授 弘田禮一郎 氏



#### ○自己紹介

熊本大学臨海実験所(現マリンステーション)で海洋生態学(プランクトン)を研究

#### ○生活様式による海の生き物の分類

ベントス Benthos (底生生物)

ネクトン Nekton (遊泳生物)

プランクトン Plankton (浮遊生物)

必ずしも小型の生き物ということではなく、浮遊生活をするクラゲなどもプランクトンになる。

#### ○海食物連鎖について

- ・有明海は干満差最大6mで、広大な干潟も有するので、多様な生きものが生息している。
- ・ケイ藻…単細胞で、分裂すると連なって生活する。
- ・渦鞭毛藻…ケイ藻と似た生活様式を持つ。
- ・ケイ藻や渦鞭毛藻が海食物連鎖の始まりとなる。
- ・海食物連鎖は、ケイ藻(渦鞭毛藻)→コペポダ copepoda(カイアシ類)→小型の魚→大形の魚。

#### ○多様な有明海の生き物の紹介

- ・ムツゴロウ…干潟の上をはい回り珪藻を食べる。
- ・トビハゼ…ムツゴロウに似るが小型で、こちらは動物食。
- ・ワラスボ…泥の中で生活。
- ・イヌノシタ(シタビラメ)…海底で小動物を食べる。
- ・ウミタナゴ…魚であるが本種は「胎生」。
- ・タイラギ…昔は多かったが減った。
- ・マテガイ…食用になる。
- ・ウミタケ…水管が大きい二枚貝。
- ・ミドリシャミセンガイ…現在日本では有明海にのみ生息(岡山県にもたが絶滅)。名前に「カイ」とあるが、軟体動物ではなく触手動物腕足類。有明海では食用にする。
- ・ツメタガイ…二枚貝を捕食する巻貝。卵の塊はその形から「砂茶碗」と呼ばれる。
- ・イシワケイソギンチャク…砂地に生息。食用となり、「ワケノシンノス(ワキヤー)」と呼ばれる。
- ・ハナワケイソギンチャク…イシワケイソギンチャクの近くに生息している。食用となりおいしい。
- ・ヤツデヒトデ…再生能力が高い。貝を捕食する。大きい獲物を食べる時は胃を体の外に出し、包んでから消化する。
- ・ナマコ…海底の泥と一緒に有機物を取り込んで消化する。

- ・ウノアシ…カサガイの仲間。岩の上に「家」を持つ。潮が満ちているときに岩の上をはい回り、くっついて藻類などの餌を食べても、また元の場所に戻ってくる。
- ・ウミウシ…いろいろな色彩を持つものがあり、美しい。貝の仲間。幼生の時は貝がらがあるが変態後はなくなる。
- ・アメフラシ…敵に襲われると紫色の液体を出すことから「雨降らし」の名前がある。

#### ○質疑応答

- ・海苔養殖との関係は？

むしろ水温などの影響が大きいのではないか。秋から初冬の水温が高い→ケイ藻が増えて栄養分を使ってしまう→海苔が増えない。ケイ藻と鞭毛藻類との関係も影響があるのではないか。

- ・海水中のマグネシウムとケイ藻との関係は？

マグネシウムは大きな影響はない。ケイ藻はケイ素の殻を持っているため、海水中のケイ素の量が影響する。ケイ素は川からほとんど流入してこないので海中の量の上限は決まっており、そちらの量の影響の方が大きい。